

真説・

泥団子姫



作：裏RY.0助

第一章

押しかけ姫

Chapter 1 : Princess stormed

その青年にはおよそ際だった特徴というものが無かった。

普通の容姿。

普通の家族。

平凡な名前。

「あるある」で片付けられてしまうような凡庸な日々。

誰の記憶にも残り、誰の記憶にも残らない平均値の生活が続くものと誰もが考えていた。

そう、この時この直前までは。



「く、くだしゃい！ 泥団子くだしゃい！！」

それが青年と、のちの泥団子姫との衝撃的な出会い。

天のいたずら。

宅急便だろうと思った。

チャイムに呼ばれ、手狭な玄関口の戸を開ければそこに立っている。

しかし実際はどうだ。

その娘は小包らしき手荷物も抱えておらず、回覧板で回すようなバインダーも持たない。

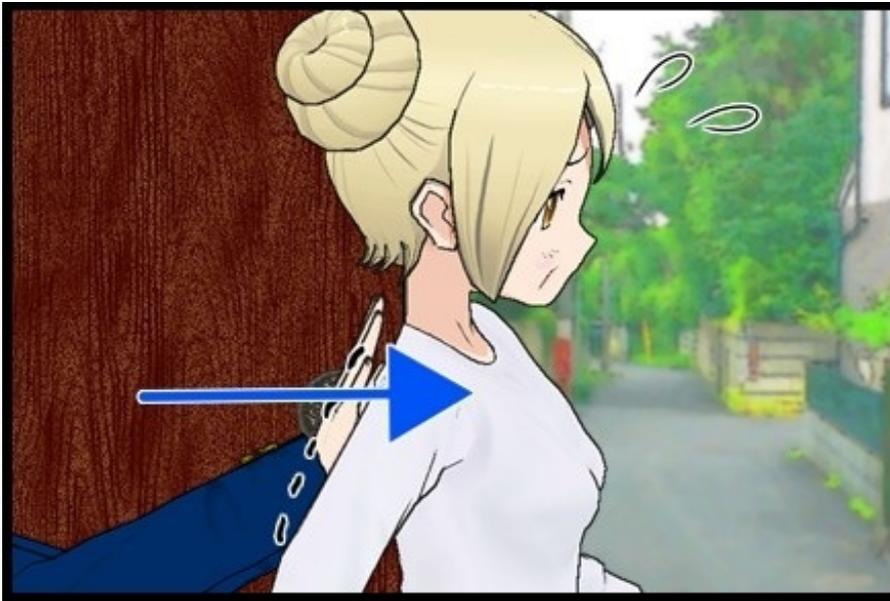
何か部屋に散らかしていたものを雑に羽織ってきたような服装で、どう考えてもユニフォームには見えない。

お団子ヘアを両側に携えさらに倍乗せたような妙な髪型に、そばかすが目立つ顔——まあ容姿の事はこの際どうでもいい。

極めつけは、普通に生活していればおいそれと耳にしないであろうレアな単語。



「ギブミー泥団子！！！」



「帰ってくれ」

青年は回り込んで娘の背中を押した。

紛う事無き拒絶の行為。

同じ年頃なのだろうが、そこは男女。

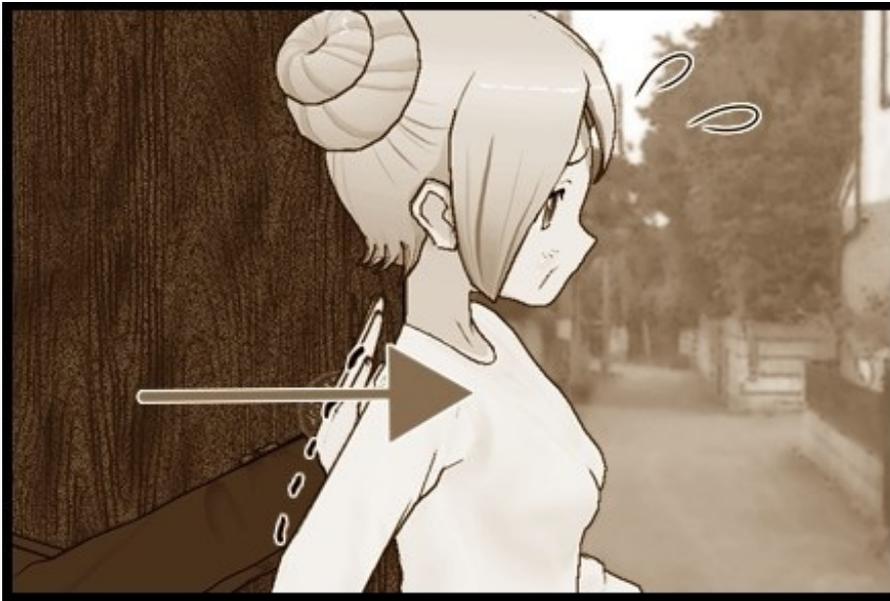
押し戻す感覚は弱く、娘の華奢な体つきをベクトルで感じさせた。

慈悲もないと思うかい？

だってこの娘は、少しでも耳を貸せば土足で上がり込んでくるタイプに決まっている。

ほんの少しの時間で、青年はそんなふうには警戒出来た。

だからこれはきっと、人並みに当然の防衛行動。



それにしても、何故あの女は泥団子なんか欲しがったんだろうな。

青年は、布団に潜り目をつむったまま昼間の事を思う。

それは考えても詮無い事。

家族が様子を見に来る前に調子よく追い出せた。

妹には「宗教の勧誘だよ」と嘘を教え、教えられたままに夕食の席で親たちに嘘を伝播する。

何の問題もない。

阿呆みたいな非日常の兆候は未然に防いだ。

だから、何も心配する事なくまどろみに落ちれば、それだけでいい。

第二章

泥团子姫

Chapter 2 : Mudball princess

翌日、学校。

日は必ず沈み、必ず昇る。

見えないとしてもそれは天候やらが邪魔をしているだけで、宇宙単位では当たり前地球は自転しているのだから。

——てんこう、ねえ。

同音異義語を思い浮かべ、青年は苦笑した。

そんな漫画みたいな偶然があったたまものか。

それ故に。

青年は次の授業で使う現代国語の教科書に目を落とし、書かれてある漢字の羅列に没頭するという虚構逃避に走った。

普段ならそんな真面目な事はしない。

前の席の級友と雑談するか、黒板を見るフリをして女子を観察するか。

つまりどちらかといえば前を見ているケースが大半。

なのに今日に限って下を向いていた。

僅かほど気付くのに遅れるのも当然。

虚構である、と貫き通そうした厄災を教師が現実引き連れてきたなど。



「みなちゃん、私が転校してきました」

「……………へっ？」

馬鹿げている。

ふざけている。

“私が”転校してきたから何だというのだろう。

ああもう、皆が皆真夏の蝉の合唱のように騒ぎ出すものだから誰が何を意見してるのやらわかりゃあしない。

とりわけ昨日、このトンチキな娘と出会った青年などひどいものであった。

毛が抜けるほどに頭を掻きむしって現実に切り替えようとする。

でも、切り替えようにも既にこれこそが現実。

娘はスラスラとチョークを走らせると、注目せよとばかりに黒板を二度打突する。



「私の名前は『泥団子姫』と申しましゅ。みなしゃんよろしく」

それはギャグで言っているのか。

ほら、転校初日の挨拶は掴みが肝心というじゃない。

まず不思議系キャラでイメージを固めてどうか。

ほら今後の生活が不利になるだけだろう。

世界中どこを探してもそんな名前も伝承も無い。

ニックネームなのか、中二病的な二つ名なのか。

このありえない名前を本気で本名だと主張するならば、どこで区切ればいいのやら。

朝のホームルームが終了する。

それからクラスの学生達は現国、数学、物理、英語とインドアな教科をつつがなく消化し、

体育や美術など変に個性の出る教科だったなら、「泥団子姫」はどんなミラクルな行動に出るだろうか。

きっと誰もがそう思ったか、近い思考を巡らせたに違いなかった。

なにせネジの2，3本どころか十数本飛んだ自己紹介をする娘である。

転校生が女子ともなれば男子達は休み時間を見計らって群がりそうなものだが、それすら無い

。距離を測りかねる言動と、別にどうという事も無い容姿。

青年は、10分休みのたびに逃避した。

昼は食堂で大盛りかき揚げうどんを啜（すす）り、器を空にするとこれまた同じように逃避した。

場所は男子便所。

自称泥団子姫のあの奇抜さを思えばこの聖域も踏み荒らされ、紳士の部分も覗かれるのではと危惧したが。

少なくとも今、昼までは無事。

おかげで少しは心に余裕も出てくる。

泥団子姫、どろだんごひめ。

あいつも妙な事を口走る奴だ、とまるで他人事のように今朝の自己紹介を思い返し軽い苦笑。

朝よりも肩の力の抜けた手で教室の扉を開けると、



そこには信じがたい光景が！！

「ねえねえアンタ、泥団子姫なんでしょ？」

「じゃあ泥団子食えるよね」

「ぷぷっ、超ウケるんですけどwww」



信じがたいだって？

3人も女子が泥団子姫を囲って、おはぎのようにぎゅうぎゅうに固めた泥団子を押しつけているこの光景を信じがたいだって？

俺は何を甘い事を。

出る杭は叩かれる。

朝のあの発言を聞いて、それを「不思議ちゃんアピール」だと思わない奴はそうそう居ない。

きっと、女子達にとってはさぞ不愉快な杭。

だから叩く。

誰かがこの不愉快な杭に躓（つまづ）いてしまわないうちに、容赦なく叩く。

その程度の可能性はチラッとでも考えてたはず。

考えてて、目を背けて逃げ続けてた。

この状況を信じがたい事だなんて、おはぎよりも甘い。

じゃあどうする。

考え得る可能性を現にこの目で見て“確定”してしまったのなら、青年にとって取るべき行動は1つ。

「よせよ。嫌がってるだろ？」



バシッと音がしたかと思うと、それは泥団子姫を囲んでいた女子の手から弾け飛んで床に散った。

青年の中指人差し指に残る感触は「おはぎ」などではなく確かに「泥団子」で、

「泥団子」を奪われた女子の手は青年に「直接」叩かれたわけでもないのに血の線が浮かび上がって、

残り2人の女子が見た青年の顔は「いつもの顔」などではなく確かに「いつもじゃない顔」で、

その場にいる誰もが驚く。

泥団子姫も、それを囲っていた女子3人も、青年までも。

青年は泥団子姫を放っておけなかったんだろう、と考えるのが妥当だろう。

トラブルメーカーである姫をわざわざトラブル起こしてまで助ける必要があったのだろうか。

きっと青年自身わかってない。

それよりもわからないのは、泥団子を弾き落とされた女子だった。

血の線には一滴ほどの血の玉。

これは外で泥団子を握って持ち込む時に「おはぎ」のように偽装させるのに使った銀色の包みで切った傷だろう。

故意ではないにせよ、青年に一言二言でも怒鳴りつけてやりたい。

けど、青年の「いつもじゃない顔」に間近で射竦（いすく）められた。

割に合わないじゃない。

こいつは無益で無毒で、居ても居なくても私の人生に影響を与えないモブキャラ。

その認識を今この瞬間だけでも、早急に改める必要がある。

キレた人間が何をするかわからないことは少しは知っているつもり。

たかが切り傷ぐらい無かった事にして、友達にも見せないようにして隠せば1日で治る。

犬に噛まれただけ。

残り2人の女子は友達がどうしても何秒も固まってるかと大げさに見ていたが、すぐ同調の道を選択。

入学以来からの日の浅い付き合いとはいえ、それぞれの親たちからは良く思われなような付き合いとはいえ友は友。

顔き合い、この場で取るべき行動が同じである事を目で確認する。



「おぼえてろよ！」

1秒たりともこんな所に居たくない！

そんな心の声が聞こえてくるような慌てぶりで逃走する女子3人。
同じ捨て台詞なのに一人だけひとときわ大きかった気もするが。

どうでもいい。

目立たず普通に暮らす事を信条としてきた青年だが、せっかく巡ってきた「カッコつけ」のチャンスだ。

この女は別にタイプではないし鬱陶しいぐらいだと心のメモリーに刻んである。

なのに千載一遇——いや待ち望んではないにせよ「絶好のタイミング」という名の薫香に指が動き口が開く。

「大丈夫か？」

優しく声を掛けてみるが、とても打算的。

少なくとも青年自身はそう思ってる。



「余計な事しゅんなー！！！」

えええっ！？！？

女子達がお前の事いじめようとしてたから助けに入ったのに何で俺怒られてんのーっ？

青年はひどく困惑する。

泥団子姫は「普通じゃない顔」で両手を高く構える。

遠近がおかしくなったんじゃないかと錯覚するほど近付き、見下ろし、深い闇色に彩り、その顔は筆舌に尽くしがたい怒り顔。

「せっかく泥団子が食べられると思ったのにー！！！」

次の瞬間、青年は沈んだ。

精神的にじゃない。

物理的に。

めりっ、と嘘みたいな軋みを伴って床の中に。

「思ったのにー！！」

べきり。

「思ったのにー！」

ぼきり。

「のにー！」

ぐしゃり、ごぶり。

両手チョップをしこたま浴びせる。

トンカチに打たれた釘のように段階的にめりこむ。



一体全体、泥団子姫とはどこでこれほど器用で効率的な空手を習ったのか。

打撃はおそらく骨には届いておらず、だというのに間違いなく床を削りて被害甚大。

まるきりギャグマンガじゃないか。

骨折はしていないのに凄く痛いし、床の木目は何かの冗談のように盛大に引き裂かれているなんて。

————それから。

潮の引いたように静かになった教室の窓際で、青年は机に手を置く。

自分の机。

裏返しに置かれたプリントは泥団子姫からのメッセージかと身構えたが、違ってくれたようだ

。

六時限目で配られた宿題らしい。

床に埋められた傷を癒すため少し保健室で寝ていた、その間に置かれたものだろう。

全く、額から血を流し遠くにクラスメートの騒ぐ声を聞いた頃には病院行きか、もっとすりゃ ICU（集中治療室）を覚悟したぐらいなのに、つくづく運が良い。

それとも、早々に日常に戻された俺は運が悪いのだろうか。

「泥団子...泥団子ねえ」



青年はアゴに手を当てて悩む。

まだ数人残っている教室内の話し声を遮断して、思考の世界に至る。

自称泥団子姫がどうしてそこまで泥団子を欲したのか。

意地悪な女子達に泥団子をねじ込まれていたあの状況は、自称泥団子姫にとって本当に待ち望んでいた瞬間なのか。

謎は深まるばかり。

第三章

黄昏姫

Chapter 3 : Twilight Princess

知ってた。

あれは常識の埒外すぎて、常識の埒にいる青年には理解の材料が不足しすぎる。

悩んでも、考えても、何も為さない。

蠟燭（ロウロク）に火を灯しそこに時間と脳細胞をくべているに等しい行為。

思考停止なんて言葉は多くの場合逃げ道を塞ぐために使うものだが、停止する以外にどんな良策があるというのか。

青年は大人しく家に帰る事を選択するほかない。

泥団子姫の事はひとまず置いて。

宿題のプリントや机の中の教科書などを鞆に仕舞い、義理程度に投げかけられる心配の声を義理程度に受け止めて返し、昇降口を抜けて冬の寒空の下に滑り落ちるその姿は小さい。

夕の刻。

こんな時間でもくっきりと伸びる影は日の短さを如実に表し、冬の季節を否が応でも感じさせる。

吐く息も白く、元気に走る子供達を買い物帰りの主婦達を、早く帰れとばかりにせき立てる。



青年もこれに倣う。

家に帰ろう。

カラスは鳴いていないけど、帰る時間だから帰ろう。

「あ」

短く呻（うめ）く。

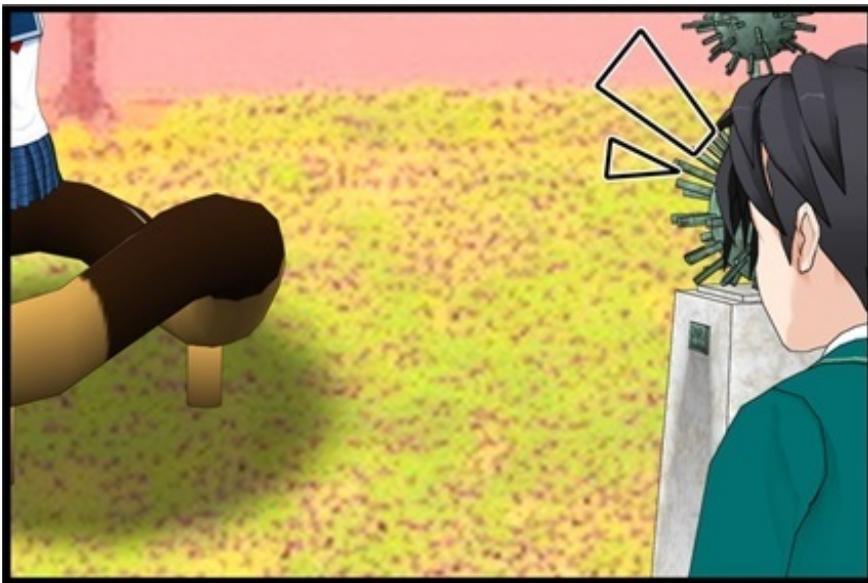
どうやら青年は、オブジェの奥に会いたくない人影を見つけたようだった。

場所は御鱈市北公園。

過不足無く揃えられた遊具やオブジェを常緑樹と真新しい鉄柵に囲んだこの公園はジョギングコースや通り抜けの通学路として利用されている。

この日ばかりは天体観測をする市民も多かろうが、まだ時間が早いのと敷地面積の広さもあって場所取りのブルーシートは点々としか見あたらず。

青年も通学という理由で毎日通過していると。



あの奇怪なお団子ヘアーは、間違いなく泥団子姫。

まだ沈まぬ夕日に照らされたその小さな背中は青年の存在に気付かぬ様子で小刻みに蠢（うごめ）く。

ゴソゴソ、ゴソゴソと。

ああ関わりたくない関わりたくない。

でも、もし見過ごせない悪巧みをしているのだとしたら止められるのは自分だけでは。止められなくとも、誰かにその様子を伝えられるのは自分だけでは。

善良な市民としての使命感か。

はたまたただの好奇心か。

気付かれないうちに十分な距離を保ちながら、青年は泥団子姫とおぼしき人物の顔が見える角度まで回り込むのだが。



「まずいでしゅ……」

人影は期待を裏切る事なく、泥団子姫その人だった。

自ら名乗った名前すら裏切る事なく、ぱくぱく、もさもさ。

泥団子を食べ続ける。

泣きながら、肩を震わせて。

わけがわからないよ。

よい子は決してマネをしてはいけないよ。

ただ1つわかった事がある。

この姫は何かを企んでるとかじゃなく、変だ。

それもすごく変。

どういう信念か嗜好かさっぱり

呆れ、隠れる事をやめたのだろう。

泥団子姫のすぐ隣に寄ってきた青年が、

「莫迦な事を。泥団子は食べるものじゃない。子供だって知ってる常識だろ」

「自作の泥団子じゃ口に合わないでしゅ……」

諭してみたようだが、話がかみ合わない。



泥団子姫はぷいとそっぽを向き、

いや、でも、これは。

自作だという泥団子と、青年の間を、泥団子姫の曇った表情が行ったり来たり。

どれぐらいの間そうしていただろう。

青年にとって5分にも10分にも感じられたに違いないのだが、そのはずや無し。

冬の太陽は未だ沈まず。

ややあって、何かを決意したように腰を上げる泥団子姫。



「やはりこの星で私の求める泥団子を確保するのは難しいようでしゅね」

！！！！

立ち上がった泥団子姫が指さす天体。

ああそうか、今日は皆既月食の日。

ちょい待てそこじゃない。

つい今し方まで夕方だったはずなのに暮れている！？

泥団子姫が立ち上がった途端に、茜色の空が群青の空に塗り替えられている！？

加えて、まだおかしな点がある。

月が異様に大きい気がする！！

皆既月食なんて珍しい現象はそうそう見かける現象じゃないからこういうものなのかもしれないと納得しかけた。

違うあり得ない、それにしたって大きすぎる！！！！

待てよそれ以上に聞き捨てならない台詞を言ったよこの泥団子姫。

「うちゅううちゅう」

宇宙舐めてるよね。

何なのこの超展開！？

青年の頭は完全にショートしているだろうとも。

はて公園には誰も居なかつたらうか。

今ここに青年が居て、泥団子姫が居て、空は深い青に鋭い赤。

少なくともそれは事実。

そんな状況に追い打ちを掛けるように降りてくる眩（まばゆ）い光。
よく知ってるよテレビや図鑑で見た事がある。
アダムスキー型、じゃないかな。
誰もがその存在を知りながら、科学的に確認された事の無い物体。
未確認飛行物体。
通称「U F O」。

ちょ、ちょっとまで誰だこいつ？
誰だこいつ誰だこいつ！？

それは言う。

「私の秘密を知られた以上、この星には留まれません」
「自分から秘密話してるじゃないか！ ていうか宇宙人だったの！？」

少しだけ目が慣れてくると、眩く光るU F Oの口からより一層眩い光を感じる。
さあどうぞ姫、といわんばかりな。



「しやらば、青年。私は次にやる星で泥団子を探します止めないでくだしゃい」

さあ青年、待ち望んだ展開だよ。



「誰も止めてねーよ早く行け！」

青年が冷たく突き放すと、泥団子姫は寂しそうな顔で宇宙船に乗って、空高くへと消えていきました。

めでたしめでたし。

終章

旅立ち姫

Epilogue: Princess Departure

だから、この話はここでおしまい。

不可思議な現象は起きたけど、寝て起きれば「あれは夢だ」と脳を整理する事が出来る。



なのにこの気持ちは何だろう。

ちっとも片付きゃしない。

何が？

決まってる、泥団子姫の事だろ。

あいつは出会った時からわけがわからなくて、関わりたくないのに関わらざるを得ないぐらい目が離せなくて。

この運命からは逃れられない予感がしたのに、急にあっさりと去っていった。

空へ、宇宙へ。

洗面台の栓を抜いたようにきゅるきゅるキュルキュル、

不思議な軌跡を描きながら、人類が容易く到達出来ない彼方へと消えていった。

なのに消えてない。

気味の悪い事に泥団子姫の顔が消去出来ずに残っている。

怒った顔。

哀しそうな顔。

楽しそうな顔。

喜んだ顔だけが抜けている。

「クソッ、何だってんだよ！」

震えているのは、きっと外気のせい。

冬の寒さが家路へ急ぐ旅人を、天体望遠鏡を武器に高台を目指す勇者を、軒先で焼売を売る商人を、夜の歓楽街へと躍り出る遊び人を、等しく痛めつける。

街を照らす街灯も、道を埋めつくす赤いテールランプも、あの眩い光ほど温めてはくれないだろう。



「クソッ。クソッ！」

肩を狭めて、青年は歩く。

行儀の悪い眩きを少女が純粋に不思議に思ったのか指を指し、お約束のように母親に咎（とが）められている。

なぜ歩くのか。

公園で立ちつくしても何にもならないから。

泥団子姫に塗り替えられた夜空は夜空のままで、やけに大きかった皆既月食は普通の色と大きさに収まっていて。

今日は特別空を見上げる人が多いはずなのに誰もU F Oの噂をささやかない。

ぼつぼつと公園に集まった部活生や家族連れ。

月食ではなくU F Oの姿を追う青年は場違いだと直感して立ち去った次第。

どこへ歩くのか。

決まってる。

天文部でもなければ写真部でもない帰宅部の青年の行く先など当然家一択。

最初から帰るつもりで公園を通っただけなのだから。

街を横切ると、閑静な住宅街に辿り着く。

郊外とはいえ空の星は街明かりに殺され、生き残っているのは白く丸い月だけ。

そこで青年は気付いてしまったようだ。

家路がやけに遠く感じるのは気持ちの問題だけではないと。

歩いては立ち止まり、空を見上げてたから。

月しか無いと知るとまた歩き、また立ち止まるから。

ああそうか、心の奥底では期待してたのか。

頭では頑なに否定してたのに体がそれを肯定するこの道化ぶりよ。

目立たず普通に生活していたという生涯の目標はとうに壊されていたのだ。

自宅に着いた。

玄関をくぐる。

「お兄ちゃん、遅いよ。今日は大事な日なのに」

二階に上がろうとすると妹が声を掛けてきたが、気の利いた返事を考えるのが億劫で無視した

。

今夜は庭から皆既月食を見上げる約束をしたような気がしたけど、もうお腹いっぱい。

突然の出会い。

何かが変えられてしまうと思ってたのに、そいつは転機をもたらす前に消えた。

「何も始まってないじゃないか！」

より正確に言うなら、そいつは未知の魔術だけを見せておきながら種明かしも解説も放棄して去ったのだ。

泥団子姫、ねえ。

このモヤモヤした気持ちをなんとかしてくれるなら、不可思議な現象ぐらい付き合っただけでやる。

喜んだ顔を見せてくれるなら泥団子ぐらい握ってあげるから。



「だから帰って来いよ、泥団子姫」

月明かりの届かない暗闇の廊下で独り。

もう居ないそいつに向けた言葉をこぼして自室の戸を開く。



「お帰りなしゃい」

.....。

.....。

.....。

「は？」

「帰ったら『ただいま』。常識でしゅよ、HEYプリーズ！」

「いや。いやいやいやいや。ちょっと待て！」

誰だこいつは？

いや、間違えようもない泥団子姫だ！

こんな鏡餅みたいにお団子を二つ重ねして、なおかつそばかすで、雑な着こなしで、小柄で、そしてなによりこんな変な話し方をする奴なんてそうそう居ないだろ！！

「宇宙に帰ったんじゃないのか？」

「気が変わりました」

「どうして.....」

「『泥団子ぐらい握ってあげる』と聞いたので」

「それついさっきの話だよ！！ てか、口に出してねえし！」

「青年の協力を得られそうなので、この星に留まった方が良さだろうと大臣しゃんも推してたし私もそう思ったので」

「大臣て誰だよ、勝手に新キャラ増やすなよ！！ ああもう、勝手に上がり込んで家族に何て説明すりゃいいんだよ！」

「家族なら洗脳済みでしゅ、妹さんから“大事な歓迎パーティーのお誘い”を聞いてないでしゅか、青年？」

「わけわかんねえ！ あと『青年』とか呼ぶな。俺にも名前ぐらいある」

「それはそうと、」

大事な事は何ひとつわかってない。
こいつは本当に宇宙人なのか。
心に思った事まで傍受出来るのか。
教室の床に俺を埋めたのは謎のテクノロジーなのか。
泥団子なんか食べて大丈夫なのか。

そもそも、なんだって泥団子を求めているのか。

「これからもよろしくおねがいしましゅ」



これは泥団子姫と、普通だった青年にまつわる壮大な話。
何も始まってない話の、何かが始まる話。

最後までお読み頂き、誠に有り難うございました。

国語力とか表現とか統一性とかいろいろと未熟な作品ではありますが、なんとか気合いを入れて完成まで漕ぎ着けました。

冒頭にも書きました通り、今作はツイッターでテキストに書き綴っていた連載ノベルをちゃんと書き直したものです。

各ページ140文字に収まったような内容を強引に地の文やら新事実を盛り込んで膨らませたものです。

当初は「ツイッター連載だけでいいや」と軽く考えてましたが、泥団子姫があの消化不良のラストに悲しみを抱いたような気がしてつい。（ということにしてください）

「終章：旅立ち姫」に至っては完全新規です。

我ながら無理矢理だな。

この小説版は完結ということで、続編の予定はありません。

その代わり所々に分岐や新規の絵を入れた「ノベルゲーム版」を制作予定です。

創作SNSの「Tomoca」の機能で作るので、完成したらあとがきに少し宣伝を書き加えて、どこか別の場所でもさらりと宣伝する予定です。

その際はPDF・ePubで読む方はダウンロードし直さなくてもOKかと。

小説という割に挿絵が異様に多い作品になってしまいました。

このへんは文章のアラを覆い隠してくれるコミPo!に感謝ということでひとつ。

素材クレジットその他

◆挿絵制作ソフト：**コミPo!**

<http://www.comipo.com/>

◆使用ユーザー 3D素材

ILMA コミPo! データWikiさんより

<http://www.irma.cc/comipo/>

へけもこさん作の「簡易教室」

時深彼方さん作の「ベッド」

e3paperさんより

<http://www.e3paper.com/>

shizuruさん作の「太陽系惑星セット」

藤あさやさん作の「公園セット」と「プリミティブ素材塗り絵キット」

——を使用しています。

素敵な素材を有り難うございました。

あ、そうそう念のため注意書き。

この物語はフィクションであり、登場する人物・団体・組織名とは一切関係がありません。

真説・泥団子姫

<http://p.booklog.jp/book/47192>

著者：裏RY.O助

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/raryos/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/47192>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/47192>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.